



Title	言語接触とゲルマン語の種類(1) : フリジア語群を中心に
Author(s)	清水, 誠
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 283-299
Issue Date	1993-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/25965">http://hdl.handle.net/2115/25965</a>
Type	bulletin (article)
File Information	20_P283-299.pdf



[Instructions for use](#)

# 言語接触とゲルマン語の類型 (1)

—フリジア語群を中心に—

清水 誠

## 1. はじめにく注1>

今日は「言語接触の諸相」というテーマでお話しさせていただくわけですが、私は日頃からゲルマン語という狭い枠の中で物事を見ている者ですので、一般的な話は得意ではありません。そこで、今回は言語接触による言語史上の類型（言語のタイプ）の変化について、ゲルマン語を例にとって解説することにさせていただきます。

ゲルマン語は伝統的に西ゲルマン語、北ゲルマン語、東ゲルマン語の三つのグループに分けられてきました。しかし、西ゲルマン語という統一体を認めることは、F. マウラー (Maurer 1952<sup>3</sup>) や E. シュヴァルツ (Schwarz 1951) をはじめとして今日ではほぼ無理ですので、発表ではこのことを意識して「いわゆる西ゲルマン語」と称し、異質な種々の言語を含んだひとつのグループを指す名称として用いることにします。その意味では残りのグループについても問題が出てきますが、ここでは問わないことにします。

東ゲルマン語（ゴート語など）はすでに消滅しており、今日、残っているのは前者の二つです。いわゆる西ゲルマン語は現在、英語、フリジア語群、オランダ語、アフリカーンス語、ドイツ語、ルクセンブルク語、イディッシュ語を含み、英語は別として西ヨーロッパを中心に遠く南アフリカまで用いられています。また、ピジン英語 (pidgin English) をこれに準じて扱う可能性も考えられるでしょう。一方、北ゲルマン語（ノルド語）としては、北欧のスウェーデン語、デンマーク語、二種類のノルウェー語 (bokmål と nynorsk)、アイスランド語、フェーロー語が数えられます。

言語接触という点で近年、注目を集めているのは、むしろピジン英語をはじめ、アフリカーンス語、イディッシュ語といった比較的后代の発達によっていわゆる西ゲルマン語から派生した言語であるといえます。しかし、私の知識は限られていますので、ここでは中世からの文献を備える残りの言語を中心に、歴史的な視点と類型的な視点の関係について解説を施すことにしたいと思います。

まず、発表の背景をなす私の立場ないし目標について簡単に述べさせていただきます。

## 2. 歴史的分類と現状のずれ

ゲルマン語の分類は一般的に歴史的な視点に立っています。「ゲルマン語学」(germanische Sprachwissenschaft)という、中世やそれ以前にさかのぼろうとする歴史的な言語研究を連想するのが普通ですし、「ゲルマン文学」といったらもっと極端にそれが現われるでしょう。言語研究の場合、これは前世紀の輝かしい歴史言語学の威光と理解できますが、じっさいに現代のゲルマン語を学んでみると、歴史的な分類とのギャップに戸惑うことが少なくありません。こうした乖離は言語接触に起因するところが大きいのです。そもそも、たとえばドイツ語の歴史はまとまった文献が出てから1250年くらいしかありません。百歳の人が十二人半並んだらもう終わりです。それ以前のはるか昔にどんな接触があったか、はかり知れないものがあります。N.S. トゥルベツコイ(Trubetzkoy 1939)は、印欧祖語は単一の言語だったと仮定する必要はなく、異なった言語の話し手による接触や相互の影響を経て成立したとも考えられ(ib. S. 82)、現在、印欧語といわれている言語も、じつは印欧語になったり、そうでなくなったりしながら発達してきた(ib. S. 85 f.)という趣旨のことを述べています<注2>。系統的に疑う余地がないと思われるゲルマン語についても、いわゆる西ゲルマン語のなかに「北海ゲルマン語」(Nordseegermanisch)というグループがありますが、その後裔というべきフリジア語(群)の話し手は、考古学の発掘の成果やH.クーン(Kuhn 1961, 1963)などの研究によると、かつてはゲルマン人ではなく(ケルト人でもなく)、長いあいだにゲルマン人の言語や文化に同化されていった民族であるらしいのです。今日ではそれがしだいに定説になりつつあるように思われますが(Feitsma/Alberts/Sjölin(1987: 5f.)参照)、そうした人々が現在では北海ゲルマン語の唯一の後裔たる言語(群)の話し手なのです。

このように、言語史の「現実的な」理解には言語接触の問題を避けて通るわけにはいきません。ところが、言語接触のケースは散発的な語彙の借用といった断片的なものにとどまることのほうがむしろ多く、「構造」という概念を中心に社会的要因や言語外事実を極力廃止して発展してきた現代言語学には、あまり魅力的なテーマとして映らなかったようです。素朴な印象からいっても、知らない言語の特殊な単語ばかり羅列されては面白くないし、「ノンノ」という雑誌の名前が「かわいいもの」という意味のアイヌ語からとったらしいなどということは、酒の席での小話にしかなりそうもありません。前述のビジン英語の研究も、おもに言語の普遍的特性の解明に興味深い理論的示唆を与えるという理由で行なわれているようです。「ゲルマン語学」という名称が上述のような響きをもつのは、ひとつには今世紀の言語学の発展の裏に隠れた研究の停滞があります。じじつ、現代ゲルマン語全体を広く見渡してまとめた著作はかなり手薄なのです。

### 3. 標準語の成立と言語接触

言語接触という「現実的な」言語研究の軽視にまつわるもうひとつの例は、ドイツ語学に

おける方言研究の比重の低下にも見られます。いわゆる標準語は、本来、あくまで言語規範の抽象的な構築物であるはずですが、それを既存のもののみならずという前提に乗ってしまえば、言語接触やら方言やらというのは、もはや標準語という堅固な館にふりかかるうるさい塵のようなものでしかありません。とくにドイツ語のような文明国家の大言語の場合には、この傾向が著しいといえます。その結果、言語研究の対象は話者の頭の中という狭い主観的な空間に押し込まれることになり、言語間の対比や交渉にかんする研究は、軒を隔てた門外で、館の中に押し入ってくる乱暴さが認められない領域だけを対象として、紳士的に行なわれることとなります。安全な地所を固めた末、もはや標準〇〇語という名称はわざとらしい感じを与えるレッテルのように映るに至ります。たとえば対照言語学(Kontrastive Linguistik)はこのような素地のもとで発展してきた分野であるといえます。

一方、標準語はその成立過程を問題にするかぎりにおいては、言語接触と方言という視点を不断に考慮しないわけにはいきません。その二点を考慮しながら言語の内実を掘り起こそうとするのは、たしかに相当の注意と努力を要します。素朴な印象から言っても、たとえば語形変化表にいくつも異形が出てきたら、「はっきりしなくてすわりが悪い」とか「覚える量が増えて大変だ」などと思いがちで、「少々まちがえてもかまわないのだな」と気楽に構える向きは少ないでしょう。しかし、それが不安定で危険をはらんだ綱渡り的な作業のように見えるのは、たとえば現代標準ドイツ語のような文明国家の大言語の館の窓から外界をはるかに見渡しているからです。ゲルマン語のなかには北フリジア語のように標準語をもたない言語もありますし、西フリジア語やノルウェー語ニューノシュクのように標準語の性格が特殊な言語もあります。

オランダのフリースラント州で話されている西フリジア語は、今日、政治・経済の中心地である都市部ではあまり用いられておらず、そこにはオランダ語と混合したいわゆる「都市フリジア語」(Stedfrysk/Stadfries)があります。したがって、西フリジア語にほんとうに接するには、田舎の村へ行行って村人の話す言葉に耳を傾けなければなりません。西フリジア語の標準語としての規範はこうした田舎の方言を基盤にしており、他のヨーロッパの言語の多くとはかなり性格が違います。一方、北ドイツで話されている北フリジア語は約9の方言の集合体ですが、いろいろな要因があるなかで、ひとつには政治的、経済的な中心地がなかったために、今日に至るまでついに地域を越えた標準語を発達させることがありませんでした。しかも、ここではくわしく論じる余裕がありませんが、たとえばベーキング哈尔デ(Bökingharde)のニービュル(Niebüll/Naibel)のように、中心地となるべき村が発達していくと、それと同時に急速に非フリジア語化が進行していくのです。あるいは、北ゲルマン語からノルウェー語を例にとると、ノルウェーのふたつの言語のうちのひとつであるニューノシュク(nynorsk)は、おもに西ノルウェーを中心とした種々の方言の上に成り立っている言語ですが、じつは

書き言葉なのであって、とくに発音はそれぞれの方言の音韻体系にしたがってさまざまになされるのです。

#### 4. ゲルマン語としてのドイツ語；ドイツ語の方言

言語接触という視点を重んじる立場によってもたらされる間接的な利点には、ひとつは対象領域の拡大があります。後で見ると、ドイツ語という対象自体、歴史的に大きな揺れがあり、現代語の覆う枠をそのままあてはめるわけにはいきません。「ゲルマニスティク」(Germanistik)という用語は言語研究の場合、本来、「ゲルマン語の研究」という意味のはずですが、日本ではほとんど「ドイツ語の研究」という意味で理解されているようです(「日本独文学会」のドイツ語名は„Japanische Gesellschaft für Germanistik“です)。ドイツ語をとりまく周辺のゲルマン語を考慮してはじめて明らかになる事実は多く、それはドイツ語の理解に欠かすことができません。

同様に、東西ドイツの壁がなくなった現在、ドイツ語の方言の研究も重要性が再認識されることになるでしょう。とくに日本のゲルマニスティクのように標準語とその歴史に範囲を限定し、方言研究の蓄積がないままに現代語を引き合いにした理論研究に突入してしまったケースでは、方言研究は本国とは逆にドイツ語研究のフロンティアといえます。歴史的研究でも、たとえば初期新高ドイツ語(Frühneuhochdeutsch)の場合、各地の地方性にねざした文章語(Schreibdialekt)がいかに統一的文章語に収斂していくかということにもつばら目がいっているのは少し残念です。

たしかに、せつかく言語の構造的な側面を一般性の高い原理からきれいに説明できたと思ったときに、方言やら借用やらで横槍を刺されるのは、しつこい押し売りにドアをたたかれるようなものかもしれません。しかし、方言や借用を考慮することによってはじめてきれいな説明ができる場合もあるのです。それに、理論上の発見や進展を呼ぶ重要なデータは、方言を掘り起こすことによって数多く得ることができます。それは現代ドイツ語の理論的研究にも役立つはずであり、じじつ、そうした試みは徐々に行われてきているような印象を受けます。方言研究は過去の遺跡などではなく、今日の目から見てもやはり宝の山なのです。それを利用しないのはいかにももったいないと思います。Hochdeutschenistikの枠を越える発展こそ、これほどゲルマニストの多い東洋の希有な島国に求められるべき課題と言ったら言い過ぎでしょうか。

言語接触という視点は歴史と類型という問題を解く鍵になり、言語と方言の関係に再考を促し、方言研究の意義を明示し、対象領域の拡大と理論の進展に通じるキーワード的な存在であり、今日の問題意識からも大いに注目に値するといえます。

以上、理屈はこのくらいにして、この先はもつばら具体例をあげて説明していくことにし

ます。いわゆる西ゲルマン語からフリジア語(群)を取りあげて、歴史的分類と現状のずれについて述べさせていただきます。なお、以下の話では「フリジア語群」とはせずに、たんに「フリジア語」と呼ぶことにします。

## 5. フリジア語使用地域の現状

まず、次の図をご覧ください(図1. Boelens et al. 1981: 27; 図2. Steensen 1990: 5)。

図1

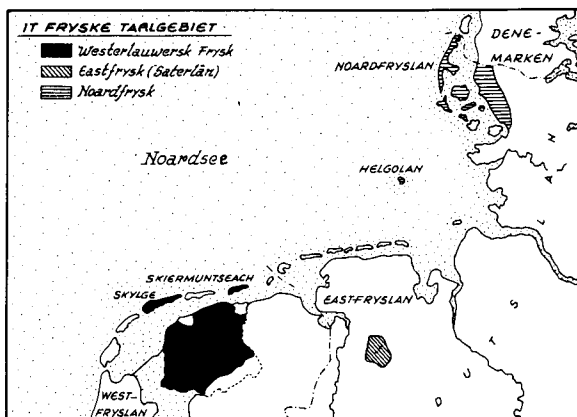


図2

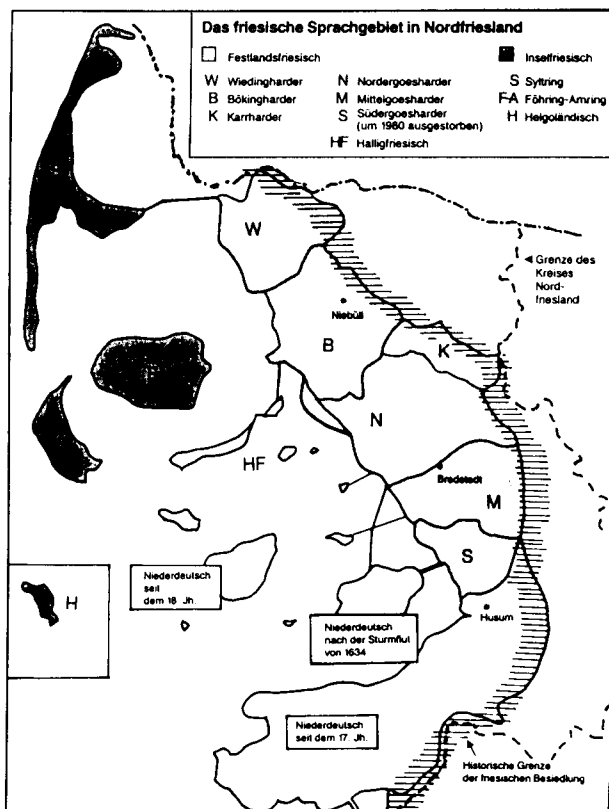


図1はフリジア語の使用地域を示したものです。今日、フリジア語はドイツとオランダにまたがり、言語的に非常に異なる三つの地域に分かれています。話し手の数は、オランダで用いられている西フリジア語(Westerlauwersk Frysk、「ラウエルス川(および以前の海、現在は湖)より西側のフリジア語」の意)が約40万人、ドイツで用いられている東フリジア語(Eastfrysk (Saterlânsk))が約1,500-2,000人、北フリジア語(Noardfrysk; 以上、いずれも西フリジア語の表記)が約9,000-10,000人と少なく、「フリジア国」というものもありません。このなかで標準語がある程度確立しているのは西フリジア語だけです。北フリジア語に至っては、図2に示すように、とくに大陸(六つの方言)と島(三つの方言)のあいだで意志が通じないほど異なる大きく分けて九つの方言(Idiome)の集合体です。もちろん、この三つの地域全体を覆う標準語はありません。したがって、フリジア語というのは単一の言語ではなく、むしろ「フリジア語群」と呼ぶべき言語ないし方言の総称なのです。話し手のほとんどはドイツ語、デンマーク語やオランダ語ないしその方言との二言語あるいは多言語使用者です。

ちなみに、私はフリジア語の話をするときにはこの図を出すことが多いのですが、それは日本ではフリジア語にたいするなじみがまだ薄いからです。独和辞典のなかで、ドイツ語の方言地図にフリジア語の使用地域を正確に記しているものは見当たりません。『三省堂言語学大辞典第2巻世界言語編(中)』(1989年刊)の「ドイツ語」の項目(1291ページ)で、「ドイツ語の方言分布」の図に東フリジア語の存在が忘れられているのも残念です。それに、

「更に、オランダに近い北海沿岸の地域には、標準ドイツ語よりは英語やオランダ語に近いフリース語を話すフリース人がいる。彼らはドイツ人であるが、ザクセン人と違って、他のドイツ人に同化せず、あくまでも自分達の言語と文化的伝統を保持したので、異民族のように見られている」(西川正雄編：『もっと知りたい国ドイツ』弘文堂 1992年刊 289-290ページ)

といった記述のある本が今日でも出版されるというのも困った話です。この本の場合、低地ドイツ語東フリースラント方言を意味する Ostfriesisch という用語を東フリジア語(「フリース語」と勘違いしているように思われます。

本当の東フリジア語は東フリースラントという行政区(Landkreis Ostfriesland)では用いられておらず、ドイツ語名でクロペンブルク郡(Landkreis Cloppenburg)のザーターラント(Saterland/Seelterlound)というところがその領分なのです。これはオルデンプルク(Oldenburg)の中心から西へ35キロほど行ったところで、けっして「北海沿岸」ではありません。この意味で「東フリジア語」というのはまぎらわしいかもしれませんが、私は「フリースラント」という用語を「地理的・行政的」な意味で、「フリジア」という用語を「言語的・民族的」な意味で用いて区別したいと思います。ドイツ語名(Saterländisch)に従って「ザーターラント

語」とするやりかたもありますが、これだとフリジア語とは別の言語のような印象を受けます。そこで、日本語としては「東フリジア語」(Saterländisch)と「低地ドイツ語東フリースラント方言」(Ostfriesisch)を使い分けたいと考えます。つまり、Ostfriesischは「東フリースラント」で使われているけれどもフリジア語ではないので、「低地ドイツ語東フリジア方言」ではなくて「低地ドイツ語東フリースラント方言」となります。また、Saterländisch/Seelterskは「東フリースラント」では使われていないので「東フリースラント語」とするのはおかしいけれども、フリジア語の仲間だから「東フリジア語」であり、その使用地域は「東フリジア」と呼ぼうということです。同じように、オランダで用いられている西フリジア語についても、その使用地域は地理的・行政的にただ「フリースラント州」(Provincie Friesland/Provinsje Fryslân)と呼ばれているにすぎません。原語のWesterlauwersk Fryskというのも「ラウエルス川(および以前の海、現在は湖:Lauwers)以西のフリジア語」という意味で、他のフリースラントと比較して「西」(Wester-)だというわけではないのです。じっさい、とくに歴史的にはこの地域は「中部フリースラント」(Middelfriesland)であって、オランダ語でWestfriesland(西フリースラント)というのは、現在のエイセル湖(IJsselmeer)西岸のメーデムブリク(Medemblik)、アルクマール(Alkmaar)、エンクヘイゼン(Enkhuizen)といった町のある北ホラント州(Provincie Noord-Holland)の地域を指します。以前はここもフリジア語の使用地域だったのです(図5参照)。したがって、くどいようですが、「西フリースラント語」ではないわけで、現在のフリジア語の相対的な位置関係からして「西フリジア語」と呼ぶのが適当であり、その使用地域は「西フリジア」となるわけです。残る北フリジア語についても同様です。

さて、前の本に戻って、「彼らはドイツ人であるが…異民族のように見られている」というのも、学問的にはまさに言語接触という視点を欠き、一般のドイツ人の素朴な常識に合致する失言といえます。このすぐ前の箇所でもドイツの多言語状況に触れて、

「事実、ドイツ人ばかりでなく、チェコとの国境にはスラブ系の言語であるソルブ語を話すソルブ人(五万人)がいるし、シュレースヴィヒ地方のデンマークとの国境には少数ながらデンマーク人がいる」(同上)

とうたっていますが、北フリジア語への言及はありません。このように、この本ではフリジア語の存在はしっかり忘れられているのです。

フリジア語の記述はドイツの専門書でも誤っていることがあります。たとえば、„dtv-Atlas zur deutschen Sprache (Werner König 1985<sup>6</sup>: 56)“がそうで、ここでは東フリースラント諸島でも今日、フリジア語が話されていることになってしまっていますし、北フリジア語の使用地域も一部で不正確です(ノルトシュトランド(Nordstrand)とペルヴォルム(Pellworm)のふたつの島は現在では非フリジア語地域)。それにしても、「ドイツ語はポルトガルでも用い



られている」などを書いたらすぐにバレますし、恥ずかしいから気をつけるわけですが、フリジア語だったら平気だというのは残念なことです。

## 6. フリジア人の商業活動と北海ゲルマン語

さて、このフリジア人というのは、前に述べたように起源がはっきりしないのですが、ヴァイキング(vikingr)といわれる北ゲルマン人が活躍する以前、7世紀半ば頃から約2世紀にわたって北海の交易を握っていた民族であることは、西洋史でよく知られているところです。

図3をご覧ください(Kurowski 1987: 47)。

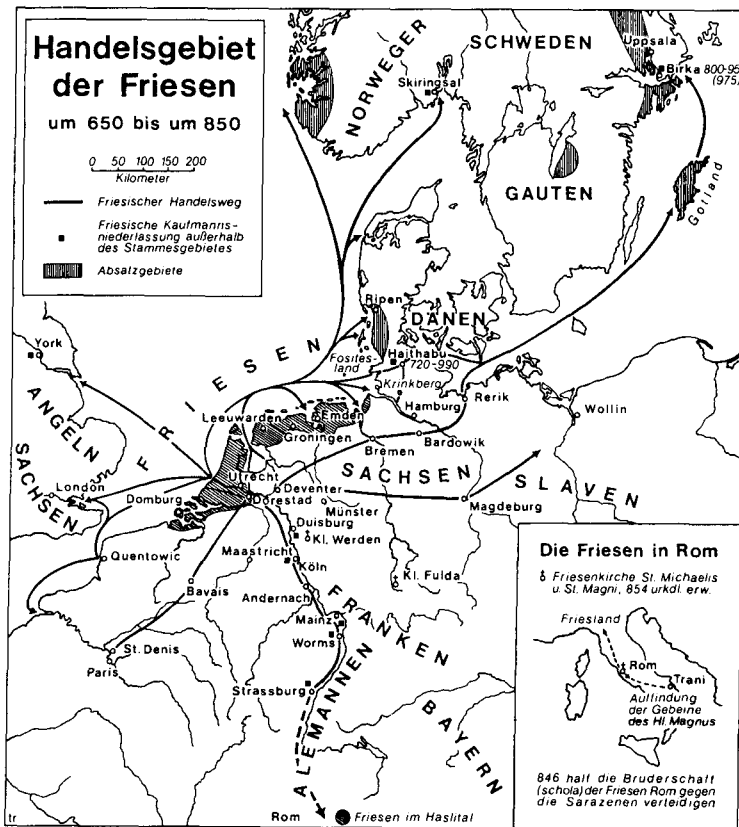


図3

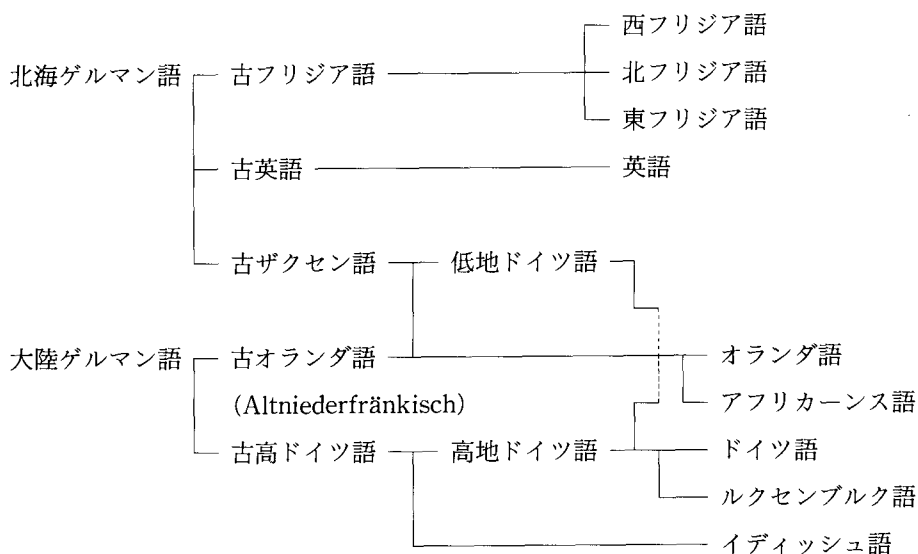
これはフリジア人の商業活動を示したのですが、後のヴァイキングと同じように、はるかローマへも出向いていたことがわかります。この図にあるフリジア人の入植地すべてでフリジア語が使われていたわけではありませんが、だいたいヴェーザー川(Weser)からライン川(Rhein)までの北海沿岸はその使用地域だったにちがいないといわれています。つまり、今日のオランダのホラント地方(Holland) – とくに北ホラント州(Noord Holland) – まで含んでいるわけです。オランダ語に北海ゲルマン語的な性格があるというのも、ひとつにはこのこと

と関係があります。一方、今日では低地ドイツ語地域に数えられるラウエルス川(Lauwers)からヴェーザー川までの北海沿岸地域は18世紀末まで、同じく東フリースラント諸島(Ostfriesische Inseln)東端のヴァンゲローグ島(Wangerooge)では20世紀初めまで、細々とフリジア語が生きていました。東フリジア語と北フリジア語の地域は後代の植民によるものと考えて間違いないようです。この図は少々不正確ですが、東フリジア語は11世紀、北フリジア語は7世紀末に島、ついで200年から300年遅れて大陸に、それぞれ植民が行なわれたといわれています。

このように、フリジア人はかつては北海を制する海辺の民として活躍していたのですが、言語的にも北海周辺のいわゆる西ゲルマン語は、共通の特徴(Ingwäonismus)によって古英語や古ザクセン語とともにひとつにまとめられるグループを形成していたと考えられており、これを「北海ゲルマン語」(Nordseegermanisch)と称します。もっとも、北海ゲルマン語という言語の文献が残っているわけではありませんし、そもそも単独の言語を想定するのは無理で、言語接触の結果として生じた「言語共同体」(Sprachgemeinschaft) –あるいは、いわゆる「言語圏」(Sprachbund)として理解するべきだという意見も強いのです。ともかく、いわゆる西ゲルマン語が複数の言語のよせ集めにすぎないという説はよく知られていますが、その下位グループもまたしかりということになるわけです。

## 7. いわゆる西ゲルマン語の分類

ここで問題のいわゆる西ゲルマン語の分類について、いろいろな説があるなかでとくに北海ゲルマン語という視点に重きを置いて考えてみましょう。次の表をご覧ください。



いわゆる西ゲルマン語は、歴史的には北海ゲルマン語と大陸ゲルマン語(Kontinental-germanisch)のふたつのグループから成り立っているといわれます。大陸ゲルマン語というのは「エルベ川ゲルマン人」(Elbgermanen: Alemannen, Baiern など; いわゆる Irminonen)と「ヴェーザー・ライン川ゲルマン人」(Weser-Rheingermanen: Franken, Hessen; いわゆる Istwäonen)の言語の総称ですが、後の民族移動によって、今日では前者は上部ドイツ語(Oberdeutsch)、後者は中部ドイツ語(Mitteldeutsch)およびオランダ語とくにフランケン方言(Frankisch/Fränkisch、後出)の地域に移っています。北海ゲルマン語は「北海ゲルマン人」(Nordseegermanen: Angeln, Sachsen, Friesen; いわゆる Ingwäonen)の言語の総称です。両者は単一の言語を指す名称ではなく、いわゆる西ゲルマン語とはさまざまなゲルマン人諸部族の相互の接触と混交によって形成されたグループを意味することになります。

ここで注意すべき点がふたつあります。ひとつは、今日の高地ドイツ語(とくに中部ドイツ語)とオランダ語(ザクセン方言を除く)がかつては大陸ゲルマン語というひとつのグループに属していたこと。もうひとつは、高地ドイツ語と低地ドイツ語がもともと別々のグループに属していたことです。したがって、標準ドイツ語、つまり高地ドイツ語は、歴史的に見ると低地ドイツ語よりもオランダ語に近いことになります。ゲルマン語におけるオランダの位置を論じた Th. フリングス(Frings 1944: 10)が「アントワープからケルンに至る言語的な道程は、アムステルダムからミュンスターに至る道程よりもゆるやかである」(„Man kann sagen, daß der sprachliche Weg von Antwerpen nach Köln sich sanfter geht als der Weg von Amsterdam nach Münster.“)と言っているのはこのためです。前者はフランケン人(Franken)の言語領内を通過するだけであるのにたいして、後者はエイセル川(IJssel)を越えたあたりで、フランケン人の言語領内からザクセン人(Sachsen)の言語領内へと移っていくことになるからです。

ところが、ドイツで出版されているドイツ語史の概説書には、よく「低地フランケン方言」(Niederfränkisch)と称してオランダ語までドイツ語の方言扱いしていることがあって、J. ホーセンス(Goossens 1971)などのオランダ語を母語とするゲルマニストの正当な反論を呼んだことがありました。これなどは歴史的分類と現状の分類の混同、ならびに言語と方言という概念にたいする誤解を示す端的な一例と思われる。なるほど、英語で Dutch(すなわち Deutsch)とはドイツ語ではなくて、オランダ語を指す名称ですし、Pennsylvania Dutch とはアメリカのペンシルヴェニア州で使われているドイツ語のことですから、「ドイツ語こそオランダ語の方言である」という逆手に取った言いかたも、もとの主張と同様にまともであり、同時に屁理屈であるわけです。そもそも Deutsch のもとなるラテン語の theodiscus という名称が786年の文献にはじめて現われたときには、イギリスのゲルマン語(つまり、今日の英語)を指していましたし、時代は下って有名な A. シュライヒャー(August Schleicher)の印欧語の系

統樹(Stammbaum)に見られる deutsch とは、ゲルマン語全体を意味していました。いかにも議論を呼びそうな名称です。しかし、オランダ語、とりわけ Dietsch (今日では Diets) たることを今日まで標榜するフランドル地方(オランダ語の原語(Vlaanderen)に近い呼び名としては「ヴラーンデレン」)の人々の方言(Vlaams)をこうして擁護したホーセンスも、今度は「北フリジア語はドイツ語の方言である」(Goossens 1977: 49f.)などと言って、フリジア語研究者の反論(Walker 1983)を買ったことがありました („Da diese Mundarten (=北、東フリジア語、筆者) von unserer Definition der deutschen Dialekte ohne weiteres erfaßt werden, betrachten wir sie als deutsch...“ Goossens 1977: 50)。一流の言語学者のあいだでも、一般にマイナーなものにはいささか冷淡な風潮があるようです。同様の記述は V. M. ジルムンスキー(Schirmunski 1962: 32)にも見られます („... und ihre (=der Friesen、筆者) Sprache wurde in Deutschland (...) sozusagen zu einem Dialekt des Niederdeutschen ...“, ib.)。

## 8. 低地ドイツ語とオランダ語

さて、低地ドイツ語の前身である古ザクセン語(Altsächsisch)は、フランク王国の勢力の進展とともに早くからフランケン語(Fränkisch—「フランケン方言」という言いかたは避けることにします。この点、ドイツ語は便利)の影響を強く受けて北海ゲルマン語的な性格を失い、不幸なことに、断片的な地名などを除いて、現在残っている9世紀半ばの最初期の文献 („Heliand“, „Altsächsische Genesis“)からは、北海ゲルマン語的な性格はあまりうかがい知ることができません。そこで、古英語と古フリジア語がいわゆる西ゲルマン語のなかでもっとも顕著な共通性を示すこともあって、かつてフリジア語学の分野で不朽の業績をあげたS. ジーブス(Theodor Siebs)のような人も、いわゆる Anglofriesisch/Anglo-Frisian という単一の言語の存在を主張するに至ったのです。しかし、起源を同じくする単一の言語とすることには無理がありました。

こうして北海ゲルマン語から大陸ゲルマン語に移行した古ザクセン語は、ハンザ同盟の発展を背景として、中世の一時期(14世紀半ばから15世紀)、スカンジナビアからバルト諸国を含む北ヨーロッパの広大な地域で共通語たる地位を獲得したものの、新興諸国やオランダ人の商業活動によって徐々に勢力を失っていきました。そして、17世紀に至って高地ドイツ語との対比で「低地ドイツ語」(Niederdeutsch)と呼ばれるようになり、標準語たる高地ドイツ語の傘下にはいって「ドイツ語になった」ということがいえるのです。最近では「古ザクセン語」(Altsächsisch)にかわって「古低地ドイツ語」(Altniederdeutsch)という用語が普及してきましたが、それにはこうした発想の転換があります。ただし、「古低地ドイツ語」と言ったときに、前述の事情がまったく忘れられてしまうとしたら問題でしょう。

ところで、さっきの話で英語で「ドイツ語」(Deutsch; オランダ語で Duits)を指す Dutch という名称は、オランダ語でも Duutsch, Duitsch (北部) / Dietsch (南部) のように16世紀までオランダ語自身を指す名称として使われてきました。それがそのころからすたれはじめたのは、次のような政治的な理由によります。すなわち、ヘント(Gent)出身の生粋のネーデルラント人である有名なカール五世(Karel V, 在位1516-1555年)が自ら継承したブルゴーニュ公国(Bourgondië)を拡大し、今日のベネルクスの大半を占めるネーデルラント十七州(De Zeventien Provinciën)として1513年に統一します。そして、1518年にそれをブルグント＝クライス(De Bourgondische Kreits)としてハプスブルク帝国の一環に組み入れてしまいます。ネーデルラントのオランダ語を話す人々は、自分たちがドイツ・ハプスブルク帝国とは違うという意識から自らの言語に新しい名称を求めました。さまざまな呼び名が現われたなかで有力だったのが Nederduitsch でした。こうして、オランダ語は「ドイツ」という本来の自称のお株を奪われるかたちになり、低地ドイツ語と共通の呼び名のもとに、以後、長いあいだ理解されるようになります。ちなみに、最初の蘭和辞典として有名な稲村三伯の『ハルマ和解』(1796)の原本であるオランダ語－フランス語の対訳辞書は、„François Halma: Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen“とあります。一方、Nederlands という用語は15世紀末(1482年)に登場しますが、公式に広く用いられるようになるのはウィーン会議以降(1815-)、はっきり定着するのは20世紀になってからのことです。その背景には、オランダ語は低地ドイツ語とは異なるという意識を強調し、フランドル方言、ホラント方言といった地域差をネーデルラント王国(Koninkrijk der Nederlanden)の国家体制強化の一環として集約しようとする政治的な意図がありました。このように、大国にはさまれた地域の言語であるオランダ語の名称の変遷には、政治的な情勢が色濃く反映しているのです。

さて、上述のような事情もあって、オランダ語は歴史的に低地ドイツ語の仲間のように思われることがありますが、これは二重の意味でまちがいです。ひとつは、今日の言語状況から見て両者は言語としても方言としてもまとめられないこと、もうひとつは、歴史的に見て両者は前述のように別のグループに属するというこのためです。それにもかかわらず仲間のような印象を受けるとしたら、Nederduitsch という名称に惑わされるということのほか、言語学的には次のふたつの理由が考えられます。

そのひとつは「ベンラート線」(Benrather Linie)および「ユルディンゲン線」(Ürdinger Linie)です。これは第二次子音推移(zweite Lautverschiebung)にかんして、それぞれ語中軟口蓋無声閉鎖音/摩擦音(maken/machen)および語末軟口蓋無声閉鎖音/摩擦音(ik/ich)の推移をとりあげて、前者はデュセルドルフのすぐ南にある美しい宮殿(Schloß Benrath)で有名な小さな町(Benrath)、後者はクレーフェルト(Krefeld)の東に位置する町ユルディンゲン(Ürdingen)を通ることにちなんで名付けた、高地ドイツ語と低地ドイツ語を分ける等語線の

ことです。そうすると、オランダ語と低地ドイツ語はともに両方の等語線の北側に入るとい  
うことで、いっしょになってしまうわけです。

ベンラート線およびユルディンゲン線に代表される第二次子音推移による区分は、ドイツ  
の文化的・政治的背景をよく反映しており、たしかにドイツ語の方言区分としては便利で  
す。しかし、これはあくまでも高地ドイツ語の領域をクローズアップするためのものである  
ことに注意すべきです。つまり、たんに両方の等語線以北の地域が高地ドイツ語ではない  
ということであって、ひとつにまとめられるということではないのです。論理的に考えても、  
A、Bという二者の対立があったとして、Aとも異なるCがBから分かれたからといって、  
残りのBとAがいっしょになるというのは、Cから見た場合だけの話にすぎません。それは  
「半分歴史的」であるわけです。それでも歴史は歴史だとも言えますが、「もっと歴史を」と  
いう立場からするといまひとつ物足りません。じじつ、ユルディンゲン線(ik/ich)はオランダ  
語地域の南東部／リンブルフ方言(zuidoostelijke groep/Limburgs)の北側を通過しています。  
つまり、オランダ語でもリンブルフ(Limburg)の方言では、ik, mik, jou, ook のかわりに  
それぞれ ich, mich, dich, ooch(hd. auch)という高地ドイツ語的な語形を用いるわけです  
(Vandeputte 1987: 49f.)。第二次子音推移の欠如は、とくに長母音における i-ウムラウト  
(i-Umlaut)の欠如とともに、オランダ語の保守性を示す指標として理解するべきでしょう。  
それに、たとえば th > d (engl. think/dt. denken, brother/Bruder, bath/Bad-Bäder, pl.)の  
変化は、なるほど中世においては次例のように高地ドイツ語に限られますが、

ahd. denken ; as. thenkjan, afr. thanka/thenza, anfr. (=altniederfränkisch) thencon,  
ae. þencan, an. þekkja, got. þagkjan

ahd. brüoder ; as. brōðar, afr. brōther/brō(d)er, anfr. bruother, ae. brōðor, an. brōðir,  
got. brōþ ar

ahd. bad ; as. bath, afr. be(i)th, ae. bæþ, an. bað

今日ではオランダ語(denken, broe(de)r, bad-baden,pl.)や低地ドイツ語(denken/dinken,  
Broder, Baad-)でも d という音を示します。一方、そのほかのゲルマン語においては、

フリジア語：「t 語頭 / d, ð, <ゼロ> それ以外」。例：wfr. tinke, broer, bad-baden,  
pl. ; nordfr. (=mooring) tånke, brouder/[sölring. brōðer], bād ; saterl. toanke,  
Brúur, [boadje 'dt. baden']

アイスランド語：「θ 語頭 / ð それ以外」。例：þekkja, brōðir, bað

フェーロー語：「t 語頭 / <ゼロ等> それ以外」。例：teinkja, brōðir [ˈbrœulr], bað  
[bæa]

ノルウェー語ブークモール(bok.)／ノルウェー語ニューノシュク(nyn.)／スウェーデン  
語(sv.)：「t 語頭 / d それ以外」。例：bok. tenke, bro(de)r, bad ; nyn. tenkje, bro(de)r,

bad ; sv. tänka. bro(de)r, bad

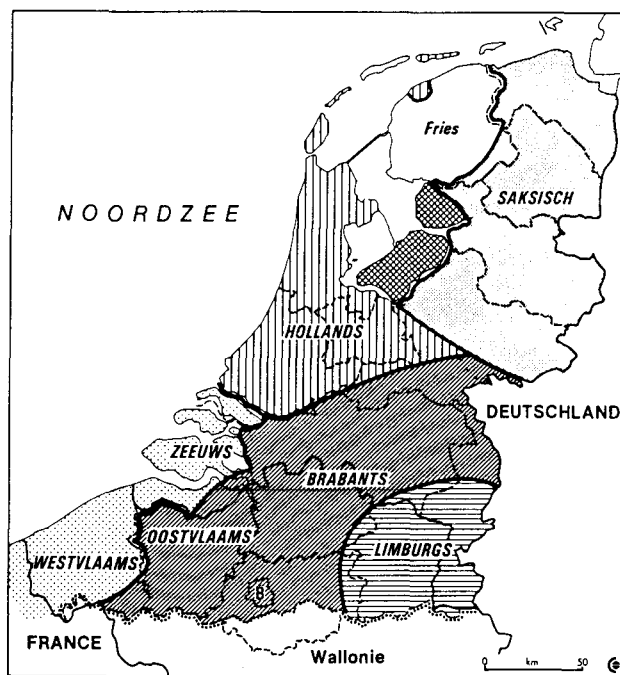
デンマーク語：「<sup>t</sup> 語頭 / ð それ以外」。例：tænke, bro(de)r [bro : ðʌ, bro(:)R], bad [bað]

のようにさまざまに分布しています。

このように、ドイツ語学におけるモーセの十戒たる第二次子音推移もあいまいな性格を示し、つまるところ高地ドイツ語のバイブルにすぎないのです。

もうひとつはオランダ語内部の問題です。次の図4, 5をご覧ください(図4 : Vandeputte 1987 : 48 ; 図5 : Frings 1944 : 44)。

これは今日のオランダの言語状況を歴史的な立場からの方言区分に基づいて示したものです。このなかでフリジア語は別の言語なので除外すると、今日のオランダ語は東北部のザクセン方言(Saksisch/Sächsisch)と、それ以外の諸方言の総称であるフランケン方言(Frankisch/Fränkisch)のふたつを含んでいることがわかります。このうちでFrings(1944 : 44)の図5では、北ホラント州(Noord-Holland)から南ホラント州(Zuid-Holland)にかけての海岸部がフ



- |          |   |       |   |
|----------|---|-------|---|
| .....    | Taalgrens in België.                              |       | Hollands: noordelijk centrale en noordwestelijke groep. |
| ---      | Provinciegrens.                                   | ====  | Limburgs: zuidoostelijke groep.                         |
| —        | Staatsgrens.                                      | ..... | Saksisch: noordoostelijke groep.                        |
| <b>B</b> | Brussel.  | □     | Fries.  |
| □        | Westvlaams en Zeeuws: zuidwestelijke groep.       | ▨     | Gemengd.  |
| ▨        | Oostvlaams en Brabants: zuidelijk centrale groep. |       |   |

図 4

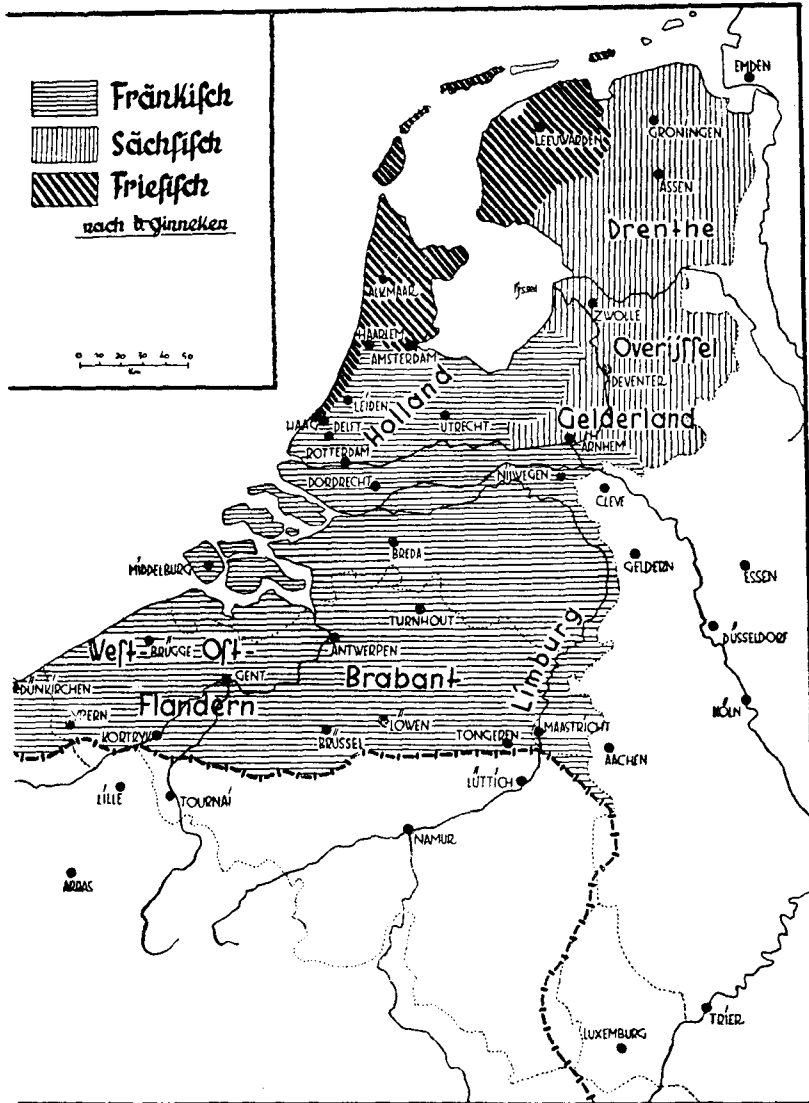


図 5

フリジア語地域に続いているように記していますが、これは前に述べたように、ここがかつてフリジア語地域に含まれていたために基層(substraat)としてのフリジア語の特徴が顕著であるととらえているためです。

ここで上の問題に戻ると、オランダ語を低地ドイツ語（古ザクセン語の後裔）の仲間とする主張は、東北部のザクセン方言を念頭に置いていることとなります。たしかに、歴史的に見るとドイツとオランダのザクセン方言は国境を越えて連続しています。今日ではそれぞれの標準語の傘下に入って、両者の連続性はそうとう失われていますが、それでもたとえば動詞の語尾は、両者ともに（低地ドイツ語は西低地ドイツ語(Westniederdeutsch)について）複



数形で人称の区別なく -t となります (Einheitsplural ; ヴェイネン (1966 : 104f. 訳注10) 参照)。

しかし、今日の標準オランダ語 (Algemeen Beschaafd Nederlands : ABN) は17世紀アムステルダムのホラント方言を中心としつつ、スペイン軍による1585年のアントヴェルペン (Antwerpen) 陥落後、多数のフランドルやブラーバント (Brabant) 出身の有力者たちの北部への移住にともなうネーデルラント南部の方言の影響を強く受けて成立しました。アントヴェルペンからの移民を両親に持ち、ケルンに生まれて後にアムステルダムで活躍したヨースト・ヴァン・デン・ヴォンデル (Joost van den Vondel 1596-1687) はその代表ですし、1637年にレイデン (Leiden) で刊行された欽定訳聖書 (Statenbijbel) には多数の南部出身の学者が参加していました。ちなみに、南部からの移民は総計15万人を数え、たとえば1622年にはアムステルダムで住民の33,4% (35,000人)、レイデンで67,0% (30,000人) に及んだのははじめ、ネーデルラント北部のおもな都市では平均して住民の約42,4%を占めたといわれています (van der Holst/Marschall (1989 : 55) 参照)。つまり、今日の標準オランダ語の基礎はフランケン方言内部の広汎な融合によって形成されたものなのです。たしかに、オランダ語における北海ゲルマン語的な特徴は、フランケン方言地域海岸部の基層となるフリジア語の影響をはじめ、今日の標準オランダ語の規範の揺れとしても反映していることがあります。けれども、現代標準オランダ語は基本的にあくまで古低フランケン語に由来するものです。この意味で、オランダ語を北海ゲルマン語に含めている Bußmann (1990<sup>2</sup> : 277) の記述は誤りであると思います。同様に、北海ゲルマン語的な特徴が「ある程度認められる」という理由でオランダ語もまた「北海ゲルマン語に属している」とする『研究社英語学辞典』(1982 : 494) の記述も勇み足でしょう。オランダ語の歴史言語学的分類にかんしては、Frings (1944) から半世紀たった今日でも意外に類書に記述の統一性が欠けています。詳細は檜枝 (1992)、ヴェイネン (1966)、Weijnen (1974) をご参照ください。

さて、ふつう今日のオランダ語内部での区分といえば、ホラント方言を中心としたオランダのオランダ語 (北部のオランダ語) とベルギーのフランドル方言 (いわゆる「フラマン語」; 南部のオランダ語) の対立が頭に浮かびます。たしかに、Deutsch/Dutch のもとになった Duutsch, Duitsch という北部の語形に対して、Dietsch とはフランドルおよびブラーバントといった南部の語形を示しており、古くから両者の差異は目立っていました。しかし、南部の方言がこれほどその独自性をアピールするのは、13世紀のブリュヘ (Brugge)、ヘント (Gent)、イーペル (Ieper) といったフランドルの諸都市や、15/16世紀のアントヴェルペンを中心とするブラーバントの商業活動と文化的隆盛、ならびに1830年以降、ベルギーという国家体制の確立に負うところが大きいのです。つまり、言語外的な要因に基づいているわけです。もちろん、これは現状の把握としては正しいのです。ただし、その対立は「方言」というよりも、「標準

南オランダ語」(Algemeen Beschaafd Zuidnederlands: AN)という規範を備えようとしているフランドル方言の、北部の標準オランダ語(ABN)にたいする「言語」としての対立になるといえるかもしれません。ここに、歴史的分類と現状の区分のずれ、ならびに言語と方言の関係にかんするもうひとつの例を認めることができます。

さて、時間も迫ってきたようですので、後半部に移る前に、ここで休憩をはさみたいと思います。(以下、次号掲載)

注：(参考文献は次号掲載)

- 1) 本稿は「北海道大学第九回言語文化部系間シンポジウム『言語接触の諸相』(1993年2月10日)」で行なった講演の内容の一部に大幅な加筆と修正を施したものである。
- 2) „Es gibt also eigentlich gar keinen zwingenden Grund zur Annahme einer einheitlichen indogermanischen Ursprache, von der die einzelnen indogermanischen Sprachzweige abstammen würden. Ebenso gut denkbar ist, dass die Vorfahren der indogermanischen Sprachzweige ursprünglich einander unähnlich waren, sich aber durch ständigen Kontakt, gegenseitige Beeinflussung und Lehnverkehr allmählich einander bedeutend genähert haben, ohne jedoch jemals mit einander ganz identisch zu werden.“ (Trubetzkoy 1939: 82)  
„Somit kann eine Sprache aufhören, indogermanisch zu sein, und umgekehrt, kann eine Sprache indogermanisch werden.“ (Trubetzkoy 1939: 85)

後記：有益なご教示を寄せられた檜枝陽一郎先生と田中研治先生に感謝します。

- \* 本稿は1992年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。  
研究課題：「ゲルマン語類型論から見た北フリジア語の特徴－モーリング方言を中心に－」。奨励研究(A)。課題番号 04851082.

(文学部助教授)